

2003年度（平15）入学式

日本武道館の会場には、開式前から、専修大学フィルハーモニー管弦楽団による、E・エルガー作曲「威風堂々」第1番の演奏が力強く流れ、緊張する4948人の新入生と、喜びを胸に秘めた父母を祝福した。

出牛正芳学長は、式辞の中で「自身の向上の努力を。また一生の友を見つけよ」と述べ、山下徳夫理事長は「目的意識を持って、自らの進むべき道を学びとれ」と祝辞を述べ、激励した。新入生代表の倉品裕多くん（ネットワーク情報学部・専大附属高）が凛々しく宣誓。校歌を斉唱して入学式を終了した。

自己管理できるような学生に
“一生の友”を見つけよう

学長式辞 出牛正芳



本学は、今年で創立124年を迎える、屈指の伝統を誇る私立大学です。

明治の初

め、アメリカの名門大学で法律学、経済学を修めて帰国した相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人によって明治13年に創立したのが本学の前身「専修学校」です。当時、我が国が近代国家としての歩みを大きく踏み出そうと、政治、経済、法律、文化などあらゆる分野において、新しい時代を担う人材を求めていた、まさにその時でした。

4人の願いは、黎明期にあった我が国の建設、当時最先端の法学、経済学の専門知識を日本語で教え、国に役立つ若い人材を育成することでありました。こうして誕生した専修学校は、後から発足した明治、中央、法政、早稲田の諸大学の前身と共に「五大法律学校」の雄とされましたが、専修学校の特色は法律学のみならず経済学をも「専から修める」我が国初の私学だったことです。21世紀を迎え専修大学は、大学創立の精神を現代的に捉え直し、「社会知性」の開発を大学のビジョンとして掲げました。

この輝かしい伝統を受け継ぎ、政財界はもとより学術、スポーツの分野にも多く人材を輩出しました。皆さんは諸先輩に続き、本学の伝統を受

はっきり目的意識持て

理事長祝辞 山下徳夫



まず何よりも、高い倍率の中から選ばれて、本学に入学された諸君に対して、心からおめでとうを申し上げます。

この4月から、4年制大学はさらに15校増えて、現在700を超える多くの大学があります。私が学んでいた終戦直後の頃は、わずか48しか大学はありませんでした。これは国民の知的水準が高くなるという面から見れば、大変結構なことですが反面、今日、中学から高校へ進む者が96%を超え、高校から大学に進む者が49%、半分が大学に行く時代になっており、単に大学を卒業したということだけでプライドを満足させるべきではないと、私は思います。

大学に行くということはどういうことか。それは学力を、自分のものとして身につけることでありますが、これは今日、大学へ行かなくてもある程度は可能です。Aという有名な学者の講義を知りたいと思えば、諸君はインターネットなどのテクノロジーを駆使すればその講義を知ることが出来ます。今日のグローバルの時代には、世界のどこの国の学者の講義にしても、日本に居ながらにして、ある程度知ることは出来るでしょう。

しかし大学というのは、ただ単に講義を聴くだけのところではありません。先生と諸君とが直接触れ合うこ

け継いでいく責任を引き受けたのです。専修大学の学生であることを誇りとし、学生生活を有意義に送ってください。

学生生活を有意義に過ごすために、二つのことを申し述べておきます。第一に、自分自身の向上に向かって努力を怠ってはならない。そして、常に自己管理の出来る学生になってください。そのためには、日常の行動計画をたてることです。「計画のために費やされた時間は最も生産的である」とありますが、将来の目標を達成するために最も相応しい計画をたて、それが実行できるよう、絶えず努力していかなければなりません。一日一日の努力の積み重ねが皆さんを成長させてくれるのです。計画を立て、それを着実に実行していくための時間の管理も必要なことですし、健康管理も当然行わなければなりません。個人的に自由になる時間を有効に使うよう、十分管理をする必要があります。社会に出て初めて学生時代にもっと勉強していれば良かったと、後悔している人が大勢います。時間の管理を徹底的に行えば、必然的に健康の管理も出来ます。思考力、判断力、やる気、根気など勉学に必要な精神力は、身体は健康なくして処することはないでしょう。心身ともに健全な状態で、勉学に励んでください。

第二に、一生心の支えとなる素晴らしい友を見つけてください。青春の一時期に心を打ち解け、話し合える友人を持つということは学生生活のみならず、皆さんの人生をどれだけ豊かにしてくれるか分かりません。良き友は、大学を卒業してからも自分の人生のあらゆる面で、良き忠告者、良き助言者、良き相談相手としてあなたを助けてくれるでしょう。良き友を求める積極的な学生生活を考えてほしいです。

専門的な知識を得ることは、大学教育の第一であることはいまでもありません。専門を深く学ぶことは、人間の基礎を築くことです。まず専門を見定めることに努力していただきたい。自分の方向性を早く見つけ、それに向かってまい進することが出来れば、大学生活での価値は、何倍にも高まるでしょう。各学部、各研究科でのカリキュラムの中から、目標が一番ふさわしいと思われる科目を選択し、勉強することです。自分の目標がはっきり定めていない人

とによって、講義だけではなく、討論したり、お互いに議論を交わすことも出来ます。あるいはゼミという大学独特の場があって、そこでは相談相手としてもっと距離を縮めて、先生と色々なことを相談することが出来るということでもあります。こうした機会は、テクノロジーだけを頼りに成り立つものではありません。また、友を得るということも然りであります。たまには酒を酌み交わし、肩を抱き合って放歌高吟する。あるいは親にも言えないことを相談する。これは真の友を得ればこそであり、それが出来るのは、やはり学生時代だと思います。大学は、そういうところでもあるということ、どうか銘記していただきたい。

諸君は、4年すれば卒業します。卒業すると右左に分かれて、それぞれ自分の希望する職業に就かれるでしょう。あるいは学を進めて大学院に行く人もいれば、教師や、公務員になる人、自分が身につけた資格を活かして専門的な立場から、自分で独立して行く人もいるでしょう。しかし大半の人は、民間企業に就職されるのではないのでしょうか。

いずれにしても、諸君は自分の将来を、3年次や、4年次になってから考えるのでは間に合いません。今から、将来の方向性を自分で心得て、それに照準を合わせて、必要な科目に全力を尽くすという、そういった選択が、私は必要であろうと思いません。つまり、今から目的意識というもの、はっきりと持つようにしてください。

もう一つ、私が政治家の道歩いてきたから言うものではありませんが、この中から何十人か、何人でも良い。ぜひ政治家を志していただきたい。いま政治家に対する批判もありますが、国政を動かしているのは政治家に他なりません。ですから、諸君の中に、政治家になるという気持ちを持った人が、一人でも多く出ることを私は期待します。

言うまでもないことですが、国家公務員の幹部になるためには、I種試験という、上級職の峻厳たるハードルを超えなければなりません。しかし政治家にはそのような試験に偏重したハードルや学閥はありません。私は昭和44年から過去30年にわたって、衆議院に籍を置いてまいりましたが、その間、総理大臣は17人替わりしました。17人の中で、

も、選択した科目を真剣に学ぶことにより、大学生活を通して本当に自分のやりたいことが見えてくるでしょう。

今、日本経済は大変な時期を迎えています。この厳しい社会情勢の中で、手にすることが出来た貴重な大学生活です。21世紀の日本、そして世界を自分たちが担っていくのだという気概を持ってほしいと願っています。人生の充実は、一生懸命生きた人に与えられる。惰性で生きている人には与えられません。専修大学での学生生活が充実したものであり、一生を通じて自分の思い出となることを心から望むとともに、皆さんの健闘を祈り式辞といたします。

東大出身者は、4人です。そのほかに官学と言え、太平さんが一橋大学であとの12名は全員私大出身です。ですから諸君は議論を交わし、天下国家を論じて、総理大臣になることだって夢ではありません。

本学の先輩である川島正次郎さんは、自民党の副総裁を永くつとめられました。当時、川島さんは総裁になることを勧められ、総理大臣になるように言われたんですが「おれは副総裁で良い」と言って自ら総裁にならなかった。しかしそれだけの資格は十分ありました。何よりの証拠には、川島先輩は勲一等旭日桐花大綬章という、三権の長だけがいただける勲章を受章されたんです。ですから私は、諸君の中からも、そういう人物が出ることを期待して止みません。

いろいろ申しあげましたが、私は大学は、最終的に自分の思想、自分の哲学を確立するところであり、そこが高校と大学の違うところであると思います。

今日から早速、諸君の将来に向かって決意を新たにして、負けじ魂を持って頑張っていたいただきたいと思いをします。

2003年度（平15）入学式

日本武道館の会場には、開式前から、専修大学フィルハーモニー管弦楽団による、E・エルガー作曲「威風堂々」第1番の演奏が力強く流れ、緊張する4948人の新入生と、喜びを胸に秘めた父母を祝福した。

出牛正芳学長は、式辞の中で「自身の向上の努力を。また一生の友を見つけよ」と述べ、山下徳夫理事長は「目的意識を持って、自らの進むべき道を学びとれ」と祝辞を述べ、激励した。新入生代表の倉品裕多くん（ネットワーク情報学部・専大附属高）が凛々しく宣誓。校歌を斉唱して入学式を終了した。

自己管理できるような学生に
“一生の友”を見つけよう

学長式辞 出牛正芳



本学は、今年で創立124年を迎える、屈指の伝統を誇る私立大学です。

明治の初

め、アメリカの名門大学で法律学、経済学を修めて帰国した相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人によって明治13年に創立したのが本学の前身「専修学校」です。当時、我が国が近代国家としての歩みを大きく踏み出そうと、政治、経済、法律、文化などあらゆる分野において、新しい時代を担う人材を求めている、まさにその時でした。

4人の願いは、黎明期にあった我が国の建設、当時最先端の法学、経済学の専門知識を日本語で教え、国に役立つ若い人材を育成することでありました。こうして誕生した専修学校は、後から発足した明治、中央、法政、早稲田の諸大学の前身と共に「五大法律学校」の雄とされましたが、専修学校の特色は法律学のみならず経済学をも「専から修める」我が国初の私学だったことです。21世紀を迎え専修大学は、大学創立の精神を現代的に捉え直し、「社会知性」の開発を大学のビジョンとして掲げました。

この輝かしい伝統を受け継ぎ、政財界はもとより学術、スポーツの分野にも多く人材を輩出しました。皆さんは諸先輩に続き、本学の伝統を受

はっきり目的意識持て

理事長祝辞 山下徳夫



まず何よりも、高い倍率の中から選ばれて、本学に入学された諸君に対して、心からおめでとうを申し上げます。

この4月から、4年制大学はさらに15校増えて、現在700を超える多くの大学があります。私が学んでいた終戦直後の頃は、わずか48しか大学はありませんでした。これは国民の知的水準が高くなるという面から見れば、大変結構なことですが反面、今日、中学から高校へ進む者が96%を超え、高校から大学に進む者が49%、半分が大学に行く時代になっており、単に大学を卒業したということだけでプライドを満足させるべきではないと、私は思います。

大学に行くということはどういうことか。それは学力を、自分のものとして身につけることでありますが、これは今日、大学へ行かなくてもある程度は可能です。Aという有名な学者の講義を知りたいと思えば、諸君はインターネットなどのテクノロジーを駆使すればその講義を知ることが出来ます。今日のグローバルの時代には、世界のどこの国の学者の講義にしても、日本に居ながらにして、ある程度知ることは出来るでしょう。

しかし大学というのは、ただ単に講義を聴くだけのところではありません。先生と諸君とが直接触れ合うこ

け継いでいく責任を引き受けたのです。専修大学の学生であることを誇りとし、学生生活を有意義に送ってください。

学生生活を有意義に過ごすために、二つのことを申し述べておきます。第一に、自分自身の向上に向かって努力を怠ってはならない。そして、常に自己管理の出来る学生になってください。そのためには、日常の行動計画をたてることです。「計画のために費やされた時間は最も生産的である」とありますが、将来の目標を達成するために最も相応しい計画をたて、それが実行できるよう、絶えず努力していかなければなりません。一日一日の努力の積み重ねが皆さんを成長させてくれるのです。計画を立て、それを着実に実行していくための時間の管理も必要なことですし、健康管理も当然行わなければなりません。個人的に自由になる時間を有効に使うよう、十分管理をする必要があります。社会に出て初めて学生時代にもっと勉強していれば良かったと、後悔している人が大勢います。時間の管理を徹底的に行えば、必然的に健康の管理も出来ます。思考力、判断力、やる気、根気など勉学に必要な精神力は、身体は健康なくして処することはないでしょう。心身ともに健全な状態で、勉学に励んでください。

第二に、一生心の支えとなる素晴らしい友を見つけてください。青春の一時期に心を打ち解け、話し合える友人を持つということは学生生活のみならず、皆さんの人生をどれだけ豊かにしてくれるか分かりません。良き友は、大学を卒業してからも自分の人生のあらゆる面で、良き忠告者、良き助言者、良き相談相手としてあなたを助けてくれるでしょう。良き友を求める積極的な学生生活を考えてほしいです。

専門的な知識を得ることは、大学教育の第一であることはいまでもありません。専門を深く学ぶことは、人間の基礎を築くことです。まず専門を見定めることに努力していただきたい。自分の方向性を早く見つけ、それに向かってまい進することが出来れば、大学生活での価値は、何倍にも高まるでしょう。各学部、各研究科でのカリキュラムの中から、目標が一番ふさわしいと思われる科目を選択し、勉強することです。自分の目標がはっきり定めていない人

とによって、講義だけではなく、討論したり、お互いに議論を交わすことも出来ます。あるいはゼミという大学独特の場があって、そこでは相談相手としてもっと距離を縮めて、先生と色々なことを相談することが出来るということでもあります。こうした機会は、テクノロジーだけを頼りに成り立つものではありません。また、友を得るということも然りであります。たまには酒を酌み交わし、肩を抱き合って放歌高吟する。あるいは親にも言えないことを相談する。これは真の友を得ればこそであり、それが出来るのは、やはり学生時代だと思います。大学は、そういうところでもあるということ、どうか銘記していただきたい。

諸君は、4年すれば卒業します。卒業すると右左に分かれて、それぞれ自分の希望する職業に就かれるでしょう。あるいは学を進めて大学院に行く人もいれば、教師や、公務員になる人、自分が身につけた資格を活かして専門的な立場から、自分で独立して行く人もいるでしょう。しかし大半の人は、民間企業に就職されるのではないのでしょうか。

いずれにしても、諸君は自分の将来を、3年次や、4年次になってから考えるのでは間に合いません。今から、将来の方向性を自分で心得て、それに照準を合わせて、必要な科目に全力を尽くすという、そういった選択が、私は必要であろうと思いません。つまり、今から目的意識というもの、はっきりと持つようにしてください。

もう一つ、私が政治家の道を歩いてきたから言うものではありませんが、この中から何十人か、何人でも良い。ぜひ政治家を志していただきたい。いま政治家に対する批判もありますが、国政を動かしているのは政治家に他なりません。ですから、諸君の中に、政治家になるという気持ちを持った人が、一人でも多く出ることを私は期待します。

言うまでもないことですが、国家公務員の幹部になるためには、I種試験という、上級職の峻厳たるハードルを超えなければなりません。しかし政治家にはそのような試験に偏重したハードルや学閥はありません。私は昭和44年から過去30年にわたって、衆議院に籍を置いてまいりましたが、その間、総理大臣は17人替わりしました。17人の中で、

も、選択した科目を真剣に学ぶことにより、大学生活を通して本当に自分のやりたいことが見えてくるでしょう。

今、日本経済は大変な時期を迎えています。この厳しい社会情勢の中で、手にすることが出来た貴重な大学生活です。21世紀の日本、そして世界を自分たちが担っていくのだという気概を持ってほしいと願っています。人生の充実は、一生懸命生きた人に与えられる。惰性で生きている人には与えられません。専修大学での学生生活が充実したものであり、一生を通じて自分の思い出となることを心から望むとともに、皆さんの健闘を祈り式辞といたします。

東大出身者は、4人です。そのほかに官学と言えば、太平さんが一橋大学であとの12名は全員私大出身です。ですから諸君は議論を交わし、天下国家を論じて、総理大臣になることだって夢ではありません。

本学の先輩である川島正次郎さんは、自民党の副総裁を永くつとめられました。当時、川島さんは総裁になることを勧められ、総理大臣になるように言われたんですが「おれは副総裁で良い」と言って自ら総裁にならなかった。しかしそれだけの資格は十分ありました。何よりの証拠には、川島先輩は勲一等旭日桐花大綬章という、三権の長だけがいただける勲章を受章されたんです。ですから私は、諸君の中からも、そういう人物が出ることを期待して止みません。

いろいろ申しあげましたが、私は大学は、最終的に自分の思想、自分の哲学を確立するところであり、そこが高校と大学の違うところであると思います。

今日から早速、諸君の将来に向かって決意を新たにして、負けじ魂を持って頑張っていたいただきたいと思います。